



BICのエピローグ

夜の7時、電話が鳴った。出る用意はできていた。

「もしもし、フレーガ様。レッジョ・カラブリアのSheratonホテルのヴァレリアと申します。お忙しいところ恐れ入ります。総支配人に代わりましてお電話しております。フレーガ様に関わる件で、明朝10時30分ごろお越しいただけないかと存じまして」

「もちろんです。ただ、私は心配性でしてね。用件について少しでもヒントをいただければ、心づもりをして伺えるのですが」

「本当は申し上げてはいけないのですが。実を申しますと、数週間前にフランス人のご同僚の方が残していかれた未払い金の件でございます。精算のため、フレーガ様にご連絡するようにとのご指示でした」

「総支配人に、明朝伺うとお伝えください。ありがとう」

フランス人の同僚？

いったいどのどいつだ？

あらゆる可能性のなかで、思い浮かぶ名前はひとつ、Chanelだけだった。

それにしても、なぜ私の同僚を名乗り、私のものですらない厄介事を押しつけていくのか。

翌日、ホテルに着いた。

総支配人は温かく迎えてくれ、私宛てにそこへ届いていた手紙をすぐに手渡した。

郵便局ではないのだが、父も私も、親会社であるGilletteの用で50年以上にわたる顧客だったので、親切にも受け取りを引き受けてくれたのだった。

それから総支配人は、同僚の未払い金を精算する気があるかと尋ね、私はいくらなのかと訊いた。

「お願いするのもお恥ずかしいほどなのですが」と彼は言った。「あのご婦人は、封筒を開ける前に必ずお支払いいただくようにと、頑として譲られなかったのです」

「いくらお払いすれば？」

「フレーガ様、1米ドルでございます」

なんという牝犬の娘だ、あのフランス女は。

私は微笑んだ。

別れの挨拶を交わした。

それから外へ出て、手紙を開けて読んだ。

愛しい人、1ドルを払うのがどんな気持ちか、これでわかったでしょう。

キスを。

あなたのChanel

だが、話はここで終わらない。

車は持っていなかったし、バスには決して乗らなかった。

外国の大都会での暮らしが歩くことを教えてくれたので、3キロ近くを歩いて家へ帰った。

呼び鈴を鳴らした。

娘がドアを開けて叫んだ。

「サプライズ！！！！」

フェルディナンド